

新年の新聞のコラムに下記の文がありました。

「年を取ってくると、能力は衰えるものだ、自分はここまでしかできない、できることが少なくなっていくという、一般的なイメージがある。でも私はそうではないと思っています」

自らを「中年の星」とも呼ぶ宇宙飛行士の油井亀美也さんが記者会見で語った。航空自衛隊のテストパイロットだった油井さんは、300倍を超える競争率の選抜試に39歳で合格し、2009年に飛行士候補となった。その後の訓練で、様々な技術の習得や過酷な状況に耐える体力の養成に励んだ。ロケット打ち上げに使う基地と機材の関係で必須科目のロシア語を学び、冬の森でサバイバル訓練などでリーダーシップを鍛えた。そして、5月に宇宙に旅立つ。油井さんはこう続けた。「だから自分にはもっと可能性があるというところを見せたい。中年に限らず、どんな方でも自分に限界を設けているんですね。もっと上を目指してほしい」

子供のころの夢をあきらめず、実現させた油井さんだが、迷いがなかったわけではない。雑誌「ハーバード・ビジネス・レビュー」によると、選抜試験の応募が締め切られる1週間前まで、自衛隊で約束された飛行隊長の道を捨てて夢に突き進んでいいのか悩んでいた。そんな煮え切らない油井さんに、妻が言った一言が背中を押したという。「あなた、ここでやらないのはちょっと違うんじゃないの？」と。

もう一人、可能性について話した人が強く印象に残っている。昨年12月、ノーベル平和賞の授賞式で講演したマララ・ユスフザイさんだ。スピーチの最後の方で、彼女は力を込めて語りかけた。「政治家や世界の指導者だけでなく、私たちすべての人が、貢献しなくてはなりません。私も、あなたも。それが私たちの務めなのです。私たちは動くべきです。待っていてはいけません」

望んで、願って、後は流れや成り行き、あるいはだれかにまかせる。それでは何も起きないし、何も変わらない。何かが起きるきっかけに出合っても、気づかないまま通り過ぎてしまうのではないだろうか…〔毎日新聞1月7日”水説“より〕

子供たちの可能性は無限と信じて、「どの子も育つ、育て方ひとつ」すべての子供たちが自分の国の言葉を自由自在に話しているその能力の高さを信じて子供たちに接していく・・・それがスズキ・メソッドの指導者、そしてご両親の役割と強く感じます。決して音楽の専門家を育てるのが目的ではありません。すべてのスズキ・メソッドで育った子供たちが油井さんのように決してあきらめずに夢を追い、マララさんのように使命感を持って人々のために身をささげる・・・そんな立派な文化人を育てることこそがスズキ・メソッドの使命と信じています。